

箕面の森で体験から学ぶ ～「森の探検隊」プログラムの実践～

近畿中国森林管理局 箕面森林ふれあい推進センター
自然再生指導官 池田 克司

1 課題を取り上げた背景

子どもの教育においては、「生きる力」を育成することの重要性が指摘されています。このような中、森林を活用する環境教育や体験学習が期待されています。しかしながら、近年、子どもは森林と接する機会が少なくなっており、また、教員からも、森林を活用した環境学習を行えるか自信がないとの意見が多くあります。

そうした中で、箕面森林ふれあい推進センターでは、平成25年度から、小学生を対象とした林業体験や森林でどのように学習するのか等実践的取り組み、その成果を踏まえて年々内容の充実を図ってきました。

2 取組の経過

平成25年度は、下刈体験と樹名板設置、学習ポイントを巡る体験学習を実施しました。平成26年度は、これを進化させた「森の探検隊」と下刈体験、自然素材を使ったフォトフレーム作りを実施しました。

「森の探検隊」は、探検マップに記載されたポイント番号の場所を実際の森林の中で探し出し、そこに吊された指令書にヒントとともに記された課題をその場で考え、解いていくという方法で実施しました。

また、そこで学習したことやさらに学校に帰ってから調べたことを後日班ごとに発表する取組も一連のものとして行いました。

平成27年度には、教員にこの取組を知ってもらうとともに、教員から意見を聞いてプログラムを充実させるため、箕面市教育委員会が夏休み中に行っている教員研修のひとつとして、「森の探検隊」の教員研修版を企画し、小学校の教員で作る理科部会の協力も得て実施しています。

これらの取組では、当初から参加者をグループ分けした班の指導者とし

て大阪森林インストラクター会の協力を得ています。また、本年は、箕面の自然・動植物を展示説明している箕面ビジターセンターと地元ボランティア団体の協力も得て、施設見学やクラフト体験も取り入れています。

3 実行結果

1年目の平成25年度は、班を10名と大人数にしたことや決められたポイントを巡るやり方で実施したため、班としてまとまらなかったことや単に回るだけ



森の探検隊

となってしまうとの反省がありました。子どもが自主的に調べ、考えて答えを導いていく過程を大事にする必要があることがわかりました。

2年目は、班を5名程度と少人数にし、事前に役割分担や回るポイントを班で決めたり、予め先生に下見をしてもらって「森の探検隊」の楽しさを理解してもらってから子どもに接してもらうなどの工夫により、子どもが主体的に動き、考え、取り組むものとなりました。その結果、発表会を含めて先生からも高い評価を得ました。

3年目は、ビジターセンターを活用したことで、探検隊のポイントの場所で考えたことや図鑑で調べたことを、さらに深めることができ、より学習効果が深まりました。



学校での発表会

4 考察

先生からは、「環境分野での校外学習は、清掃工場と浄水場施設の見学のみであった。森林の働きやシカの被害などの学習は、教室だけの学習では理解させ難く、体験をとおしてできたことがよかった。」等の意見が聞かれ、森林を活用した取組が非常に効果的であることやサポートが必要であることが実感されました。引き続き内容の充実とPRを行い、森林インストラクターや地域の方と共に、積極的に森林環境教育の推進及び内容の充実に貢献していきます。